

(1794～1856)

資料 大漢和辞典（諸橋轍次）

航米日録（「仙台叢書」別巻第6の内）

“（「日本思想大系」第66巻の内）

## 50. 「男児立志出郷関」の全詩と その作品

問 「男児志を立てて……」の全詩と、その作者を教えてください。

答 この漢詩は「題壁」と題する七言絶句です。

男児立志出郷関 学若不成死不還  
埋骨豈期墳墓地 人間到处有青山

この詩は、多くの人々に愛唱され、僧月性〔げっしょう〕の作であると誤り伝えられてきたが、<sup>(1)</sup>実は勤王の志士村松文三の作です。「折々のうた」（大岡 信）に、

『骨を埋むる豈に墳墓の地を期せんや 人間〔じんかん〕 到る処青山有り 村松香雲<sup>(2)</sup>

幕末の志士。十五歳で故郷伊勢を出る時壁に残したという七言絶句の転結。起承部は有名な「男児志を立てて郷関を出づ 学もし成らずんば死すとも還らじ」。「人間」は世間の意。「青山」は木の茂る山をいうが、ここでは墓。骨を埋める場所をなんで家代々の墓（「墳墓の地」とだけ決めることがあろう。世間どこにも、いざとなれば死場所はある、到る所が家郷なのだ。従来僧の積月性の作とされてきたが、研究によって誤伝であることが明らかにされた。』とある。また、「明治人物逸話辞典」下巻（森 銃三編）にも、『僧月性の「題壁」の詩「男児立志出郷関。学若不成死不還。埋骨何期墳墓地。人間到处有青山。〔マ、〕」の一首が人口に膾炙〔かいしゃ〕しているが、これは実は村松文三の作るところだった。文三は月性とは深交があったのであるが、決して月性の作ではない。安政五年〔1858〕に『近世名家詩鈔』を編纂する時に、青狂〔村松文三の号〕の署名を、月性の号清狂の誤書だろうとして、月性の作としてしまったので、そのことは同書の編者巖谷一六や薄井竜之の言明するところである。』と誤伝の原因が明記されています。<sup>(3)</sup>

更に、大槻文彦の「復軒旅日記」〔歿後の昭和13年8月富山房発行〕の中の「伊豆蓮臺寺温泉滞在記」〔大正6年文彦71才の時〕に下田の村松春水〔文三の子〕訪問記があり、このことについて次のように記しています。『男児立志出郷関の詩は人口に膾炙するも此〔これ〕文三の作なり（文三仙台に来り一医家に入簪となり家娘との間に一男を設けしが一年許〔ばかり〕にして離縁して去れりと云）。京都の僧月照〔月性の誤り〕と交際深かりし故に此詩誤って月照の作と伝えられたりとぞ。』とあります。<sup>(4)</sup>但し、月性を別人の月照と誤り記している点は注意を要します。「月性」と<sup>(5)</sup>

「月照」とは全く同時代人で、同じく僧侶の身で幕末国事に奔走した志士であり、「月性」と「月照」とは一字違いではあるが同音の「げっしょう」であるので混同されたものようです。

しかし、なおいまだに「日本人名大事典」（平凡社）・「世界大百科事典」・「広辞苑」その他一応權威ある諸書にも、この詩の作者を誤伝のまま「月性」と記しています。著作物のミスが、如何に永く後世を誤まるものであるかの例証がここにあります。

注(1) 周防国玖珂郡遠崎一向宗妙円寺の住職。字知円、清狂と号す。学を好み詩文に長じた。勤王・海防論を唱えて国事に奔走、吉田松陰・梁川星巖・頼三樹三郎・梅田雲浜等と交わり、村松文三とも深交があった。彼の「清狂」の号が、文三の号「青狂」と混同され「男兒立志出郷関」の詩の作者と誤まれた。安政5年〔1858〕5月11日急病で歿した。42才。郷土の直木賞作家大池唯雄作「炎の時代」にも次のように書かれているが、誤伝によるもので間違いである。『大島〔粗暴な参謀と評された世良修蔵の生地〕……(中略)……対岸遠崎に、妙円寺という真宗の寺があって、その住職に<sup>X</sup>月性(げっしょう)という傑僧が出たことが、付近の青年たちにその影響をあたえた。月性は早くから郷俣を出て、四方に遊学し、天下の名士とまじわり、詩名が高かった。彼の作「男兒志ヲ立テテ郷関ヲ出ズ、学モシ成ラズンバ死ストモ還ラズ」は人口に膾炙(かいしゃ)し、修蔵も愛誦してやまない詩であった。清狂と号し、海防僧としても知られ、吉田松陰とも親交があった。安政5年急病のため死んだ。年四十二。』

注(2) 勤王家。宇治山田八日市場町寺崎菅仲の子、文政11年〔1828〕生。香雲また二十四狂士と号した。別に青狂とも号した。15才の時故郷を後にして、国事に奔走した。「題壁」の「男兒立志出郷関……」の詩はこの時の作である。村松の姓は、焼津〔やいつ〕の医村松文良(玄庵)に寓し医を学び、後にその女婿となったからである。青井幹三郎・同蘊遊の変名もあり、夙に僧月性と深交があった。仙台にも1年程滞在したことがあると「復軒旅日記」(大槻文彦)にあり、大槻磐溪の教を受けたこともあるという。維新後官途につき、福岡県令の辞令を受けたが病のため辞退し赴任しなかった。明治7年〔1874〕1月郷里で歿した。47才。

注(3) 幕末・明治の書家。天保5年〔1834〕近江国甲賀郡水口〔みなくち〕に生れた。小波〔さざなみ〕の父。その書風飄逸の風韻あり、詩文にもすぐれていた。明治38年歿、72才。

注(4) 国語学者。諱は清復〔きよしげ〕、通称復三郎〔またさぶろう〕、後に文彦と改め、復軒と号した。弘化4年〔1847〕1月15日、進歩的な大学者大槻磐溪の子として生れた。英学者如電の弟である。幼時父について学び、養賢堂・昌平校に入り俊秀をうたわれた。また横浜で米人に英語を習った。明治6年宮城師範学校長、同8年文部省勤務を命ぜられ日本語辞書編纂に従事した。この間10余年の苦心になる近代的国語辞書「言海」が完成し、24年4月10日公刊した。「言海」の自筆原稿は、宮城県図書館に所蔵されている。25年宮

城県尋常中学校〔現仙台一高の前身〕の初代校長となり、宮城県書籍館長を兼ねた。28年校長を辞し、30年図書館長を退職して東京へ移った。その後は研究著述に専念、特にライフワークだった「言海」の改訂増補に努めつつ、昭和3年2月17日、82才で歿した。東京高輪東禅寺に葬る。「広日本文典」「国語法別記」その他多くの著がある。「言海」を増補拡充した「大言海」本編4冊・索引1冊は、その歿後、昭和7～12年富山房から出版された。

注(5) 幕末の勤王僧。京都清水寺成就院の住職。俗姓は玉井、名は忍鎧また忍介、後に忍向と改め、月照と号した。近衛忠熙〔ただひろ〕・西郷隆盛と結んで大いに尊皇攘夷を唱えたので、幕府の追及急となり、薩摩にのがれ、遂に隆盛と相擁して入水自殺を図った。隆盛は救助され、月照は死亡した。安政5年〔1858〕11月15日、46才であった。

資料 折々のうた（大岡 信）

明治人物逸話辞典下巻（森 銑三編）

復軒旅日記（大槻文彦）

## 51. 真山青果著「焰の舞」の出版事項

問 真山青果の「焰の舞」についてM館で調べてもらいましたが、遂にわかりませんでした。いつ、どこから出版されたのでしょうか。

答 「焰の舞」は、大正8年〔1919〕真山青果が42才の4月から東京日日新聞に連載した後、同年の12月1日新潮社から出版したものです。<sup>(1)</sup> 484ページ、四六版で、「真山青果全集」〔全15巻、昭和15～17年、講談社版〕にも、「真山青果全集〔新版〕」〔本編18巻・補巻5巻・別巻2巻、昭和50～53年、講談社版〕にも収録されておらず、現在では容易に入手できない稀書になっています。この長編小説は、明治初年新政府が最重点国策の一つとして、東北開発のため巨額の国費を投入して断行しつつあった野蒜築港が、中途にして一夜の大波に吞まれて壊滅し去ったための、無惨な悲劇をテーマとして綴られたもの<sup>(2)</sup>です。政府はこの築港失敗以後、永く東北政策を放棄してしまうという、後進東北全体にとって不幸きわまる結果を招くことになってしまいました。仙台が生んだ文学の巨星真山青果の若き日、明治33年〔1900〕に旧制第二高等学校医学部を中退してから、同36年26才で文壇を志して上京するまでの失意時代は、ベールに包まれてさだかになっておりません。その間石巻郡立病院薬局生、南小泉での開業医代診、私立中学校の国語教師などの職を変えながら、<sup>(3)</sup><sup>(4)</sup>